The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国際協力キャリアへの挑戦
Author(s)	若林, 真美
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 161-167
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55575
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

5-5
国際協力キャリアへの挑戦

若林真美 大阪大学大学院医学系研究科医学専攻博士課程

国際協力キャリアへの挑戦と題しまして、私がGLOCOLから学んだこと、それをどう生かしていこうとしているかについて述べます。まず、GLOCOLとの私のかかわりを簡単にまとめます。次に、GLOCOLから学んだことが、その後どのように派生していったのか、私の体験を紹介します。最後に、今後の私が気を付けたいことを前述のGLOCOLから学んだことと関連付けたいと思います。

1. GLOCOLとのかかわり

私は、大阪大学大学院医学系研究科修士課程医科学専攻に所属していた際、8つの高度副プログラムを履修しました。（グローバル健康環境、グローバル共生、人間の安全保障と開発、国連政策エキスパートの養成、健康医療問題解決能力の涵養、臨床医工学・情報学融合領域の人材育成 教育プログラム：高度職業人育成科の予測社会医学プロフェッショナルコース、サスティナビリティ学、コミュニケーションデザイン（2010-2012年当時のプログラム名称））そのうちの4つ（グローバル健康環境、グローバル共生、人間の安全保障と開発、国連政策エキスパートの養成）がGLOCOLの教育プログラムでした。一見これらの8つのプログラムはバラバラな教育プログラムのようですが、私の中では、“国際保健”というテーマを念頭に必要なプログラムを履修いたしました。

修士課程2年間で私が体験させていただいた国際保健に関するフィールドワークの中でも、主にGLOCOLの教育プログラムと関係があるものをいくつか紹介します。例えば、フィリピンにおける災害時の国際協力というテーマのフィールドワークは、GLOCOLが、提供している「フィールドスタディ」という授業で参加したフィールドワークです（写真1）。その授業プログラムは2011年4月から開講されていますが、その試作段階として

前年度にいくつかのフィールドワークが行われました。その1つである、パラオで行われたグローバル化と健康問題に関するプログラムにも参加しました。また、韓国で行われた模擬国連と国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)のワークショップは、GLOCOLの教育プログラムである国連政策エキスパートの養成に関連しています。国連政策エキスパート・キャリア形成論という授業で模擬国連というものがあることが紹介されました。その授業を受講していた学生達が自分たちも韓国で行われる世界大会に参加してみたいと自主的に活動しました。私たちは3名ぐらいのチームをいくつか作り、東京での模擬国連に参加したあと、韓国の世界大会へも応募しました。また、同時期に国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)が若者のためのワークショップを韓国で開くということで、私はそちらにも応募しました。幸運にも選考に通りそちらのワークショップに参加することができました(写真2)。

写真1. アエタコミュニティー学校見学(フィリピン)

写真2. アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)でのワークショップ(韓国)

「健康環境リスクマネージメント専門家育成」という教育プロジェクトに3度参加し、海外フィールドワークを行いました。この教育プログラムでは、現GLOCOLセンター長である平田先生が、薬学部の学生のための教育プロジェクトとしてGLOCOL等と協力しながら

写真 3. 自宅でのVAC農法についてのインタビュー(ベトナム)

写真 4. 地元の市場で実験用サンプルを購入(ベトナム)

写真 5. 歩いて国境を超える(ベトナムから中国へ)

立ち上げられたものです。このプロジェクトの一部である海外フィールドワークには、健康に関わる環境について、多角的な視点で捉えられるよう、薬学部の学生だけでなく様々な分野の学生が参加しました。その様々なバックグラウンドを持った学生たちが自分たちの専門性を超え、ベトナム、タイ、中国における、食環境や水の処理、抗生物質などの薬品が各国でどのように処理されているのかなどを学びました(写真3, 4, 5)。私はこの「健康環境リスクマネージメント専門家育成」という教育プロジェクトにおけるフィールドワークに2010年から2012年にかけて合計3回参加しました。このレポートでは、特にこのフィールドワークがその後の私の研究成果やネットワークにどのようにつながっていったのかを中心に述べます。

2. GLOCOLから学んだこと、その後へのつながり

①異分野との協力関係の構築

海外フィールドワークから学んだことは、異分野の学生との協力関係をいかに構築していくかということです。海外フィールドワーク中は睡眠時間以外、10日から2週間近くもの間、学生達は常に行動を共にし、色々なことを議論します。その中で、お互いの研究の分野のことを知ったり、考え方の違いを知ったりと様々な発見をしました。海外フィールドワークでできたネットワークは、フィールドワーク外でも生かされました。

例えば、「健康環境リスクマネージメント専門家育成」での海外フィールドワークに2010年に参加したメンバーの1人が2011年5月27日に京都大学で開催した合同学術研究交流会(合ケン)というイベントに発表者として参加してくれました。合ケンは、高度副プログラムのコミュニケーションデザインで出会った、飯島玲生氏という方が主催されるScienthrough[1]という学生団体が行っていたイベントの1つです。合ケンは、異分野の人たちに分かりやすくコンパクトに自分の研究の魅力を伝えるという交流会

1　飯島, 玲生; 中川, 威; 石田, 峰洋; 鈴木, 竜太; 中津, 壮人; 橋本, 亮; 矢引, 達教, 学生による横断的科学コミュニケーションの試み：阪大学生有志団体Scienthroughを事例として, 科学技術コミュニケーション (Japanese Journal of Science Communication, 2010 ,7: 165-176)

です。その企画に便乗して、私が主催して合ケンを京都大学と共同でするという企画を持ち込みました(写真6)。5月27日のイベントには、2010年のメンバーの1人が発表し、他1名も京都大学までそのイベントを見学者として参加してくれました。同様に2012年のフィールドワーク参加者の3名が、同年5月24日の大阪府立大学で行った合ケンで発表してくれました。合ケンではないですが、2014年に私が大阪大学で企画した「ハンダイ的ハカセの歩き方」というイベントに2011年のフィールドワーク参加者の学生がパネルディスカッションのメンバーとして参加してくれました。彼ら、彼女たちのバックグランドは、薬学、人間科学、農学、人類学等々と非常に多岐にわたります。このような様々なバックグラウンドを持った方々とのコラボレーションをするきっかけとなったのは、健康環境リスクマネージメントのフィールドワークであったと考えます。

写真6．合ケン。(京都大学)

さらに、学生間における異分野との協力関係構築や修士課程における高度副プログラムを通した知識や体験という下地があったからこそ、私の博士論文は完成することができたと言っても過言ではありません。私の博士論文の出版論文である「Non-fatal injury in Thailand from 2005 to 2013: incidence trends and links to alcohol consumption patterns in the Thai Cohort Study」は2016年の9月にJournal of Epidemiologyという雑誌に出版される予定です。これは、オーストラリア国立大学での研究留学を経た国際共同研究です。共著者の方々のバックグラウンドは実に様々で、疫学、感染症、心理学、文化人類学、社会経済学、人間生態学を御専門にするタイ人やオーストラリア人、オランダ人、そして日本人のチームとしてこの論文を書き上げました。このような貴重な研究ができたのも、修士課程時に培った異分野との協力関係の構築力によるところが大きかったと考えます。

②経験と記録の重要性

修士2年間という中で、GLOCOLの海外フィールドワークを含め、その他学生課外活動としてのフィールドワークやWorld Health Organization(WHO)でのインターンシップと様々な国際保健に関する経験をしました。本当にどの活動も充実していました。ただ、レポートは大変苦痛でした。しかしながら、大学院生として学びに行く際、各フィールドワークで課されたレポートや報告書は、自分の学びを振り返る最大のチャンスです。そして、レポートという形で紙面に残すことで、学びを他者と共有しやすくなります。

写真7．WHO インターンシップのSupervisorsとともに記念撮影

WHOでのインターンシップを1例に挙げます(写真7)。2011年2月から4月の2ヶ月程度、私はフィリピンにあるWHOの地域オフィスである西太平洋地域オフィス(WPRO)でインターンシップを経験しました。WHOでは毎年、4月7日がWorld Health Dayといって WHOの設立を祝い、数ある健康問題の中で、今年注目する健康問題というのが選ばれます。2011年のその健康問題トピックが薬剤耐性菌でした。私は、前述の「健康環境リスクマネージメント専門家育成」という教育プロジェクトにおける海外フィールドワークで食品である家畜や養殖エビに抗生物質がつかわれ、薬剤耐性菌への危険に繋がっているということを学んでいました。その学びがあったため、WPROの私が所属する部署で2011年のWorld Health Dayに向けて行われた、各国の薬剤耐性菌に関する規制や対策状況に関するアンケートをまとめるという仕事を3月頃に任された時、とても興味深く取り組めました。インターンシップ終了後も、メールのやり取りを通して、パートナーである韓国人のインターンシップ生が中心になってその結果を論文にまとめ、2年後の2013年についに出版することができました[2]。GLOCOLで行われている研究プロジェクトであるSATREPS(地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)で「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に関して、ベトナムから研修員の方々が来日された際、この薬剤耐性菌の論文を紹介し、ワークショップをするという機会も頂きました。経験をきちんとレポートや論文の形で残していくことで、さらに学びを深め、それを共有していくことができた実例であると考えます。

また、私は、「健康環境リスクマネージメント専門家育成」の海外フィールドワークから派生し、タイビン医科大学との共同研究を修士論文とし、後にそれを出版論文としました[3]。UNICEF Vietnamでのインターンシップの

2　Yuri Lee & Mami Wakabayashi, Key informant interview on antimicrobial resistance (AMR) in some countries in the western pacific region, Globalization and Health.2013, 9: 34.

3　Mami Wakabayashi, *Socioeconomic Factors Influencing the Prevalence of Hypertension in the Rural Elderly Population of Thai Binh Province, Northern Vietnam*, Int J Collaborat Res Int Med & Public Health. 2013. 5 (7): 513 - 544

機会(写真8)を得て、またそこでの成果を論文[4]としてまとめることができたのも、ベトナムでのフィールドワークの経験があったからだと考えます。

その他のフィールドワークでも授業の一環もしくは自主的に報告書を書き残しました。例えば、2010年フィリピンでの学生自主課外活動のレポートはWHOでのインターンシップに応募する際の参考資料として活用しました。WHOでのインターンシップでは、前述の「薬剤耐性菌」に関する仕事だけでなく、Genderに関する健康保健システムをテーマに行った仕事もインターネット上でレポート[5]して存在します。この仕事から、性差から健康を横断的にとらえる視点を獲得しました。2011年は、東日本大震災が起きた年です。インターンシップ中の3月はEmergency Healthという部署で1週間、レポート[6]をお手伝いするために働きました。大震災と津波、原子力発電所被災という非常に危機的な状況をテレビで見つつ、レポートという関わり方はあまりにも無力に思えるかもしれません。しかし、その記録が残り、世界の誰かがそれを参照し、いつか何かの役に立つかもしれないという意味で、報告書は改めて大切だと感じた出来事でした。インターンシップの半年後、短期コンサルタントとして、WHOに雇っていただき、日本の保健医療供給体制についてのレポートを書かせていただきました[7]。Supervisorの方々から頂いた学びの機会を活かし、それを社会に還元していくことを念頭に置いてレポートを書いていました。一つ一つは小さな経験かもしれないです。しかし、それなしには、次のステップに進むことはなかった、どれも大切な経験であり、その記録です。

写真 8．UNICEFインターンシップ時に地方のヨウ素塩工場への視察

3. 今後に向けて

私は、来年度から、国際協力コンサルタントとして、長年夢見た国際協力を仕事としていきます。GLOCOL等を通して学んだ国際保健に関する知識や経験を国際協力コンサルタントとして活かしていきたいと思います。私自身の振り返りとして今後もっと気を付けていきたいのは、他の人にとって世界をもっと身近に感じてもらえるようにしていきたいということです。大学時代の友人や高校の時の友達などから、色々な面で、私は“変な人”扱いです。GLOGOLのフィールドワークに参加時は、国際協力が好きな人はGLOCOLに集まりました。GLOCOLの授業を受けていた人とフィールドワーク出会い、またフィールドワークであった人とまた別のフィールドワークや授業で会いました。そのようなことは多々ありました。もちろん、それは悪いことではないと思います。ただ、それだけになってしまうと周りの理解が得られず、狭い世界に閉じこもることになってしまうと考えます。だから、少々変人扱い、遠い世界の人扱いされても、国際協力なんて関心が全くないという周りの人や友達にこそ理解してもらえるようになりたいと思います。

GLOCOLのフィールドワークや高度副プログラムを修士課程の2年間で堪能し、それを様々な形でその後つなげることができました。まだ、私の国際協力への夢はスタート地点に立ったばっかりです。私のように、あまりにも色々なモノに、がっつき過ぎるのも考えものです。しかし、今後の学生達にも、もっと貪欲にやってみたいことや自分の夢に挑戦していってほしいと願います。

最後にこのような貴重な体験と振り返りの機会を賜りましたGLOCOLの先生方に感謝を申し上げます。GLOCOLから得た学びを最大限に今後も活かしてまいりたいと存じます。

4 Mami Wakabayashi. Socioeconomic Factors Relevant to the Inequity in Antenatal Care Accessibility in Vietnam. Cross-Cultural Communication, 2014, 10(2): 1-9.
5 http://www.wpro.who.int/publications/PUB_9789290615378/en
6 http://www.who.int/kobe_centre/emergencies/east_japan_earthquake/situation_reports/en/
7 http://www.wpro.who.int/health_services/health_service_delivery_profiles/en/